

あの日の頃 - 12

石川俊夫

子供達の歓声の中、今年の秋の大運動会も多くの父母、同窓生の参加のもとにくり広げられました。特に、自分が関係した懐かしい卒業生に出会くと、立派に成長していることに感嘆します。同時に、星美での奉職年数の経過をふり返る年代になったことを嬉しく思います。

さて、私は、昭和四十八年から、本校の理科専科として勤めることになりました。何よりも驚いたことに、校庭を見下ろすマリア様、そして、お祈りで始まり、お祈りで終わる子供達の姿でした。

なぜなら、それまでカトリック学校のことに全く無知で、全てが新しい経験だったからです。

実は、私の過ごした小学校は、北海道の原野、清流に囲まれた所でした。地域そのものが生活に追われ、また厳しい自然と向い合っていました。そんな状況の中で、幸いにも私は縦横無尽で自由な毎日を送っていました。それゆえ、東京の小学生はどんなことに興味をいただき学習、生活をしているのか、対面するまで不安がたえず交錯していました。

実際に教壇に立ってみますと、私とは育っている環境が違っていても、子供達は実に素直で明るく、私の話に耳を傾ける姿勢に感激したものでした。未熟な授業にもかかわらず、熱心に実験、観察に取り組む様子に、教師として、さらに努力しなければと心に誓ったものでした。

授業で使用する教材では随分助けられました。プランクトンの観察の時は、家族ぐるみで採集してきたものを持参してくれたり、コウモリ、スズメバチなど、多くの生物を提供してくれたりしました。

試行錯誤の毎日ではありましたが、私なりにいかに子供達に実感してもらえる楽しい理科学習ができるか模索していたように記憶しています。例えば、水溶液の沸点の違いを、ピーカーの中で、「水あめ」を作る過程で実験したことがあります。ベッコウ色になったあめを、アルミハクの上に固め、食べるのも楽しみの一つだったようです。何度もアンコールがあって困ることがありました。

当時は、杉村校長様のもとで、授業で何を伝え、育てていくかが校内研究のテーマになっていました。授業には目的がなければならないこと、計画的、系統的に指導するにはどうすればよいか、さらに、教育内容の精選がよく論議されました。六 A を担任していた大森先生が、突然理科準備室(現在六 A の制服かけの場所)に入ってきて、授業の目的論をわ

かりやすく教授してくれた時期でもありました。

生きた理科学習は、理科室にとどまることなく、事象がなぜ変化するのかフィードバックする態度が大事であるということで、理科学習を中心にした海浜学校の位置付けが確立した頃でもありました。ふりかえれば、教育を非常にダイナミックに考えていたように思います。

現在は、南伊豆(弓ヶ浜・逢ヶ浜)から、千葉小湊に場所が変わりましたが、同じ内容で海浜学校は続けられています。

「海の水はどうして泡立つの」

「色の鮮やかな生物が多いのはなぜか」などの子供達の発想に、勉強させられたことも多くありました。東京私立小学校の研究発表もあり、海浜学校を実施する私学も何枚かできてきました。

私は専科である立場を生かし、よくいろいろな教室を自由に出入りさせてもらいました。遊びを中心にした日常の生活から、授業で得られないつながりを持つことができました。女の子とドッジボールをし、むきになりガラスを割る失敗などがありました。いつも同じ目の高さで思いやりをもって接することができたのは、神を敬愛する子供達がいたからかもしれません。

校外学習として、よく尾瀬、志賀高原学校に参加し、登山をしたことも忘れられません。裏志賀から見た大沼のブルーが今も目に焼きついています。本当によく歩き、よく語りました。

昔にくらべると今はめまぐるしく、価値観が変わってきているように思えます。教育の方法もそれに合わせ少しずつ異なってきています。しかし、時代を越えても変わらない福音の教えは、これからも私達の支えになっていくものと確信しています。

ところで、この春、イタリア巡礼の研修旅行で、ドン・ボスコ、マリア・マザレロの足跡を見てきました。そこでは、人間の願い尊さにふれ、自分の足跡を反省するきっかけになりました。ここまでこれたのは、自分を取りまく人達のおかげであると。

「温故知新」ということわざがあります。どうか星美のよさを分かち合い、ますます同窓会が発展することを願ってやみません。

【同窓会報、第12号・平成5年1月1日発行・から転載】